分野別研究組織成果報告（2013 年度）

新たに発見された秦漢期の算術書を基にした中国古代数学像の再構築

Reconstruction of the ancient Chinese mathematics based on recently discovered mathematics books of Qin-Han period

張替 俊夫（HARIKAE Toshio）

本研究は近年中国において相次いで発見された算術簡によって、中国古代数学像を再構築しようというものである。ここでいう算術簡とは、張家山漢簡『算数書』、岳麓書院蔵秦簡『数』、雲夢睡虎地漢簡『算術』、北京大学蔵『算書』である。

従来の中国古代数学は『九章算術』を軸として語られてきた。しかし、『算数書』の発見を皮切りとして、次々と秦漢期の算術簡が発見されたことにより、従来の数学像は大いに見直しが必要となってきている。そこで、我々中国古算書研究会（以下、研究会と称する）は、月 1 回または 2 回の共同研究を通し、新たな中国古代数学像を作る作業を続けている。

まず、研究会として 2013 年度中に発表した論文は下記の通り。いずれも『数』についての訳注および研究成果をまとめたものである。

(1) 岳麓書院『数』衰分類未解読算題二題の解読、大阪産業大学論集 人文・社会科学編 18 号 (2013 年 6 月)
(2) 岳麓書院蔵秦簡『数』訳注稿(3)、大阪産業大学論集 人文・社会科学編 18 号 (2013 年 6 月)
(3) 岳麓書院蔵秦簡『数』訳注稿(4)、大阪産業大学論集 人文・社会科学編 19 号 (2013 年 10 月)
(4) 岳麓書院蔵秦簡『数』訳注稿(5)、大阪産業大学論集 人文・社会科学編 20 号 (2014 年 2 月)

論文(1)は田村誠との共著で『数』衰分類中の 2 つの未解読算題を『算数書』算題からの類推で解読に成功したもの。論文(2)は『数』の粟米類についての訳注であり、馬場理惠子と吉村昌之が主に担当した。論文(3)は『数』の衰分類についての訳注であり、角谷常子が主に担当した。論文(4)は『数』の少広類と商功類についての訳注であり、少広類を張替が、商功類を小寺裕が主に担当した。

次に関連した内容として、下記の研究発表を行った。

(5) 岳麓書院蔵秦簡『数』について、中国出土資料学会 平成 25 年度第 1 回例会、2013 年 7 月 13 日、東京学芸大学
(6) 岳麓書院蔵秦簡『数』の算題より、日本数学史学会 第 20 回数学史研究発表会、2013 年 11 月 17 日、同志社大学

発表(5)は『数』算題中の特徴的な3つの算題について紹介したもの。対象者が数学史ではなく中国出土資料の研究者であることを考慮した内容である。発表(6)は発表(5)と同じ3つの算題に

ついて数学史の立場から、『算数書』や『九章算術』との比較を通して述べたものである。

また 2013 年 11 月に北京大学にて研究調査を行った。これは北京大学蔵秦簡『算書』の整理調査責任者である北京大学中国古代史研究中心・韓巍副教授の招きによるもので、大川俊隆、田村誠と同行した。その結果、2014 年 9 月に北京大学で行われる予定の『算書』の国際研読会に招請されるに至った。その後、中国科学院自然科学史研究所を訪問し、『算書』について鄒大海教授と研究討論を行った。